



TITLE:

自由9 冷温帯林に生息するニホンザルの生態と生息環境の保全(V 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

船越, 美穂

CITATION:

船越, 美穂. 自由9 冷温帯林に生息するニホンザルの生態と生息環境の保全(V 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2000, 30: 119-119

ISSUE DATE:

2000-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165359>

RIGHT:

ミトコンドリアDNAのD-ループ
可変領域におけるニホンザルの分子系統地
理学的研究

吾妻健（高知医大・医・環境保健）

本年度は東北各県などの遺跡から発掘された骨片や厩猿の遺骨などの探索に努めた。まず、岩手県の山形村においてはすでに一個体の厩猿について解析を行なっているが、引き続き、新たに3個体の厩猿から骨片を採取した。採取した試料は、1) 成獣♀の左頬骨基部、2) 成獣♀の大孔頭、3) 成獣♂の右頬骨基部、である。これらについて前回同様の方法によりPCR増幅を行ない、塩基配列を決定したところ、3個体とも、川本（1999年）が岩手県南部の五葉山のサルで検出した2型に相当する配列をもつことが明らかになった。この結果により、かつて北上山系に生存していたニホンザル地域個体群が、他の東北諸地域の個体群と母系祖先を異にする系統である可能性がさらに高まった。また、毛利俊雄博士の御厚意で提供をうけた沖縄県首里城遺跡から発掘された成獣♀（形態的に200～300年前のアカゲザルと考えられる）の下顎M2近心歯根、さらには宮城県教育庁から提供いただいた、宮城県多賀城から発掘された、奈良時代のサル遺骨から、DNAを抽出することに成功した。この際、今回は従来の増幅領域中に新しいプライミングサイトを設計し、2つの小断片として増幅するよう試みたところ、小断片の増幅に成功した。今後この断片の塩基配列を調べる予定である。平成12年度は、数万年前の、年代の古い骨標本についても分析する予定である。

冷温帯林に生息するニホンザルの生態
と生息環境の保全

船越美穂（京都大・霊長研・社会生態）

夏期の人工針葉樹の樹皮食が近年報告されている中部山岳地帯安曇野地方で、行動域、土地利用及び食性について1997年2月からテレメトリー法と直接観察法と糞分析法を用いて調査を継続している。

今年度は、食べる時期（5月、7月）と食べない時期（10月）のカラマツ樹皮の剥け易さと、カラマツ形成層の乾燥重量あたりのカロリーを新たに調べた。被害の出ている41年生カラマツ人工林林分で、各月2本ずつ伐採した木を材料として用いた。採食時期である5月と7月では、それぞれ、2.1 (0.7-4.5) kg、7月は2.2 (1.7-3) kgの力で連続して剥くことが出来た。採食時期でない10月では樹皮がすぐ切れて、連続して剥くことは出来なかった。採食時期の5月と7月を合わせた乾燥重量あたりのカロリーは 4.39 ± 0.07 (n=4) Kcalであり、食べない10月の値 4.27 (n=2) Kcalとの間に差が見られなかった。また、採食品目である葉・茎、堅果、しょう果、根茎の乾燥重量あたりのカロリーは、それぞれ 4.31 ± 0.16 (n=4) Kcal、 4.19 ± 0.00 (n=2) Kcal、 4.18 ± 0.06 (n=2) Kcal、 4.09 Kcalであり、採食時期のカラマツ形成層のカロリー方がこれらの品目より高い傾向にあった。よって、カラマツ形成層はカロリーが高いために採食品目に加えられ、樹皮が剥けやすい採食効率のよい時期であった夏期が採食時期になったと考えられた。